

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0015
東京都東大和市中央1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2024年(令和6年)12月16日 月曜日

無料

第151号

毎月発行

発行 2024年(令和6年)12月16日 月曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。といえ新型コロナウイルス禍を乗り越えて4作目制作に向けて興味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から本を変えることを標榜。



2024年の東北を振り返ってみる 大谷翔平選手関連以外のニュースで振り返ろう！

大谷選手関連以外で東北の今年を振り返る。筆者および当新聞の視点を中心に据えて、今年の東北を振り返るとなれば、大谷翔平選手関連の話題で埋め尽くされるであろう。しかし、「今年の東北や

東北のあらゆる活動」イコール「大谷翔平選手の活動」ではないし、他にも多くの出来事があった。今年はまだ半月ほど残っているが、二〇二四年の東北を振り返ってみるにあたり、まずは「大谷翔平選手以外の動きから振

り返ってみよう。二〇二四年の東北災害。今年の東北といえば、夏の大水害を最初に取り上げなくてはならない。東北の日本海側、特に秋田県と山形県では、七月二十五日から大雨による



山形県東田川郡庄内町
2024年7月26日(金)5時57分

24時間で388mmの記録的大雨の
山形県の被災地(ウエザーニュースより)



台風5号東北直撃か
太平洋側は
災害級大雨の恐れ

台風5号の進路(tenki.jpより)

被害が大きかった。秋田県は6市2町2村、山形県は6市7町3村に災害救助法を適用し、後に「激甚災害地域」に指定された。災害救助法の適用エリアは、秋田県では、横手市、湯沢市、由利本荘市、大仙市、北秋田郡上小阿仁村、にかほ市、仙北市、仙北郡美郷町、雄勝郡羽後町、雄勝郡東成瀬村であった。山形県では、鶴岡市、酒田市、新庄市、寒河江市、村山市、尾花沢市、最上郡金山町、最上郡最上町、最上郡舟形町、最上郡真室川町、最上郡大蔵村、最上郡鮭川村、最上郡戸沢村、東田川郡三川町、東田川郡庄内町、飽海郡遊佐町だった。七月の大雨では「線状降

東北の比例代表

党派	獲得議席(女性)	得票	得票率
自民	5 (1)	1,188,975	31.4%
立民	4 (0)	993,007	26.3%
国民	1 (0)	396,991	10.5%
公明	1 (0)	367,341	9.7%
れいわ	1 (1)	271,855	7.2%
共産	0 (0)	223,409	5.9%
維新	0 (0)	165,697	4.4%
参政	0 (0)	94,354	2.5%
社民	0 (0)	79,484	2.1%

* データはNHKより、編集は当新聞

水帯」という耳慣れない専門用語が飛び交った。それは突如として出現するのでもえもっての対策がむずかしい現象である。筆者は、地球温暖化の影響で、海水温の急上昇で発生するものではないかと秘かに考えている。その大雨被害に間を置かずに発生した八月の台風五号が、さらに被災地を立て続けに襲った。通常だと、台風は、本土等を直撃する場合以外、太平洋岸の東の海上を北上する進路が普通だが、その台風は予定外の進路を取った。太平洋側から東北を西へと横切る進路を取り、七月の大雨被災地に連続で大雨被害をもたらすこととなった。

は心よりお見舞い申し上げます。二〇二四年の東北経済。今年十一月二十一日に発表『東北経済産業局管内経済動向』によれば、「全体の動向」↓緩やかに持ち直している。「鉱工業生産」↓持ち直しの動きに弱さがみられる。「個人消費」↓改善の動きがみられる。「住宅着工」↓2か月連続で前年同月を下回った。「公共投資」↓2か月ぶりに前年同月を下回った。「設備投資」↓前年度を上回る見込み。「雇用」↓有効求人倍率は前月と比べ横ばい。「企業倒産」↓倒産件数は前年同月と比べ横ばいということであり、東北経

済に大きな変動はなかった。二〇二四年の東北政治。今年十月に行われた衆議院選挙で、東北の動きを振り返ってみる。まず、自公の得票率を比較すると、「東北ブロック」は自公併せて41.1%で過半数割れだった。その点で、「東北ブロック」は自公の過半数割れに「貢献」したといえるのではないかと。かつては「保守王国」といわれた東北も様変わりしてきたといえるのではないかとと思われる。もう今年も終わる。来年の東北はどういった一年を迎えるだろうか？災害のない、良い一年であることを祈っている。

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑮ 「出羽三山」の苦い思い出 山を甘く見て大変な目に遭ったという典型的な悪い見本の話

『出羽三山』への旅

いまから八年も前のことになるが、絶対に忘れられない思い出が詰まった旅、また、他人にはおおいそれと話せないような旅、そして山歩きを知っている人からはすごくお叱りをうけるような旅をした。

それまでは、東北出身者なら一度くらいは山形の出羽三山へ登ってみたいだろうと軽い気持ちでずっと思っていたのだが、ようやく時間がなんとか取れたので、妻を伴って行くことにしたのだ。

七月になってすぐのことであり、月山はちょうど山開きした直後ということもあってその季節なら「雪渓」も見られるとも考えた。しかし、ゆっくりと休みを取れないこともあって、企

画段階から「強行軍スケジュール」を覚悟しなければならなかった。

企画段階から波乱含み

東京の自宅から出羽三山に最短で行くには、まずは羽田空港から庄内空港に飛び、そこでレンタカーを調達して目的地に行くしかない。東北の日本海側に行くには残念ながらこうしたルートしかないのだ。それでも目的地に到着するのは屋敷になる。

最初に企画した段階では、初日は羽黒山と湯殿山に行き、鶴岡で一泊して、翌日に月山に登ろうと考えた。

月山の八合目からの山登りであり、やさしい部類の山登り初心者コースとはいえ、初日に月山登山は無謀だろうということで二日に回そうとしたのだ。

しかし、月山に登ろうと計画した翌日はあいにくの雨模様で天気予報だった。登るのは比較的やさしいとはいえ、雨模様のなかを初めて登るのにはリスクが大きいと考えて、初日ならまだ天候も崩れていないので、現地到着の当日にそれも屋敷から月山に登る計画を立てた。

しかも、羽黒山と湯殿山は入口あたりだけを見て、その日は泊まらずに、とりあえず出羽三山巡りは一応やりましたよと言える程度の旅行にして切り上げて、そこからすぐに他の場所へ移動しようと考えた。

こうして、出羽三山巡りはゼロ泊日帰りの超強行軍となってしまう。そのかわりに、せっかく山形に行くので温泉にも入

ろうと、出羽三山から鶴岡に戻り、夕方の電車で山形県の東部まで移動して、「上山(かみのやま)温泉」にでも一泊しようと、欲張りな、しかし非現実的で綱渡り的な過密スケジュールの一泊二日の旅行企画となった。

月山登山は呪われたような登山に豹変した

計画通り、初日の屋敷ぎに月山の八合目から登り始めた。天候は晴れて、遠く山々も見渡せ、急げば行き帰りで三時間半程度の行程なので、何ひとつ心配することもない。登り始めてからは、山を下りてくる人には何人か会ったが、その時間から登る人は我々夫婦だけだった。それでも気にしなかった。登り始めて、ゴツゴツし

た大きな岩がある道に登るのに運動不足の身には多少つらい部分があったが、その程度のことだった。途中では「雪渓」も見られた。七月なのに雪は結構な広さで残っていて、これぞまさに「雪渓」だと感激して、ツルツル滑る上り坂

を登って、ようやく頂上についた。
* 頂上に着いて、月山神社本宮にもお参りしたあたりから、突然に強風が吹き始め、雲行きが怪しくなってきたのを感じた。さっきまで快晴だったの

に、どうしてだろうと考えるいとまもなく、みるみる黒雲が立ち込めてきて、嵐の到来の予感がしたので、頂上でゆっくりするヒマもなく、すぐに下山することにした。
急いで下山したのだが、すぐに雨が降り始めた。そ

の雨はほとんど強くなり、強風と大粒の雨が、身体中に吹きつけてきた。さらに雨と風は強くなり、まるで台風かのような様相を帯びてきた。風速は軽く二十メートルは越えていると感じた。
雨風は足元も見えないく



月山 8 合目



月山の山頂を見上げる



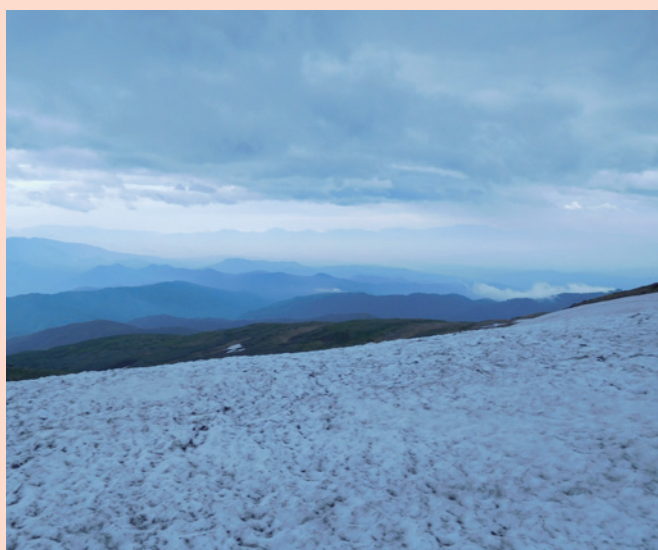
7月なのにこんなに雪が残っていた



行きは晴れて遠くが見渡せた



山頂に着いたら雲行きが怪しくなってきた



下りはじめはまだ遠くまで見えた



手足の長い妖怪は巨大な野ウサギのようでもあった

らいに激しくなり、顔にも打ちつけてきて前方が見えず、何度も途中で滑って転んだ。転んで、岩に足を挟まれ、足をくじきそうになった。足を捻挫して歩けなくなったと一瞬思うときもあつたが、何とか無事だつた。とにかく、八合目まで戻らなければならぬと必死に歩き続けた。

分たち夫婦だけで他にはだれもない。心細かつた。しかも身体中ずぶ濡れで、冷え切っていたので、レンタカーのなかで急いで全部の衣服を着替えた。レンタカーを約束した時間に返却できないと電話で連絡しようとしたが、電話がつながらない。何度か目によろやく通じて、とにかく鶴岡の駅前まで来てくれれば、車を回収するということができた。

さらに、月山から移動して羽黒山や湯殿山に行ける時間的余裕などまったくなく、それだけでなく、その日に山形県東部に移動する電車もなく、近くにその日に泊まる宿を予約しなければならなくなつたが、幸運にも何とか宿は確保できた。さらに、「上山(かみのやま)温泉」の宿も一日延期してもらつた。



西の空が血の色に染まっていた・・・あの時に似たような夕焼け

妻からは、こんな強硬なスケジュールの旅も、山登りも二度とごめんだと強く言われて、まったく立場がなかった。ミステリーな八合目からの下り道

八合目の駐車場に無事着いたとはいへ、そこは濃霧で周囲は何も見えない。しかし、他に移動手段はなく、レンタカーで移動するしかない。恐る恐る、視界五十センチの下り坂を、時速三キロほどのゆるい進みしかなく、センターラインもよく見えなかつた。しばらく走っていたら、少し霧が晴れてきた。視界が三メートル程度までになった。そのとき、車の直前をゆ



出羽三山神社は修理中だった

つくり横切る何かを見た。それは「妖怪」のようだった。足が異様に長く、手も長い。巨大な黒い野ウサギのようでもあつたし、そこにいるはずもないカンガルーにも少し似ていたが、やはりもっと別の生き物だつた。車のヘッドライトに照らし出された黒く、やせ細つた、骨太の、長さ一メートル半くらいの、見たこともない生物だつた。助手席にいた妻に、いまのは何だろうと聞いたが、何も見えなかつたという。まさか、あんなにはつき見えたのに、単なる幻覚だつたというのだろうか。いまでも大きな謎である。旅行から帰ってからはしばらくして、あの地方には「手長足長」という妖怪がいるという伝説があるのを知つた。

た。しかし、その妖怪は人間のような身体をしていて、手と足が長いだけだつた。私が見たものとはちがう。とはいへ、いまではあれはまちがいない、空想が産んだものではなく、ほんものの「手長足長」だと信じている。「手長足長」に遭遇してからほどなく霧が晴れてきた。そこで見えたのは西空に一面に広がる血の色をした夕焼けだつた。とても不吉な色に思えた。月山は山岳信仰の山である。その山を甘く見て、昼過ぎから登つたこと、時間の余裕もないままに効率的な旅を優先してしまい、山への畏敬の念を忘れた罰が下つたのだと思つた。



羽黒山の階段は長すぎる



羽黒山五重塔



羽黒山の巨杉

ホップ栽培を 東北の基幹産業に

今年もビールの「実りの秋」

今年秋も取れたての東北のホップを使ったビールがたくさん出回り、ビール好きにとっては嬉しい「実りの秋」であった。岩手県遠野市や秋田県横手市に契約農場を持つキリンがこの時期限定の「一番搾り」とれたてホップを出せば、青森県南と岩手県北に契約農場を持つサッポロはこの時期に東北でしか販売しない「黒ラベル東北ホップ100パーセント」を出す。加えて、東北のクラフトビール醸造所有志でつくる「東北魂ビールプロジェクト」も、このキリンの東北産のホップを使った多様なビールを出した。

ホップ栽培に適した東北の気候

ホップの国内生産量の9割以上のシェアを持つ東北のホップ栽培だが、近年は外国産ホップに押され、生産者の高齢化と後継者不足も相まって、年々栽培面積と生産量は低下してきている。しかし、東北でも最大の生産量を誇る遠野市や横手市では、首都圏など他地域から移住してホップ栽培に取り組み若者も少しずつ増えてきており、そうした減少傾向にも歯止めが掛かりつつあるのは明るい兆しである。

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

ホップは、アサ科に属する雌雄異株の多年生つる植物で、東北の山林や河川敷にはこれの野生種のカラハナソウが自生していること

執筆者紹介
大友浩平
(おおもともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブローグ」
<http://blog.livedoor.jp/anagma5/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouchi.ohtomo/>

るから見て、東北でのホップ栽培は気候的に適している、それが長年国内のホップ生産の大部分を占めてきた所以であると考えられる。

ホップの香りを引き出す技術

ビールは主に大麦を発芽させた麦芽とホップ、それに水とビール酵母で造られる。このうちホップはビールの香りと苦みを決定づける重要な原料である。少し前までホップはビールの苦みづけの役割に重きが置かれ、香りについてはそれほど重視されていなかった。しかし、個性的なクラフトビールが登場し、市場規模が拡大していく中で、ホップが醸し出す個性的な香りも重要視されるようになってきた。このため、既存の品種だけではなく、品種改良が積極的に行われ、多様な香りや苦みを持つホップが開発されるようになってきている。

遠野市の取り組み

先に挙げたように、遠野市は横手市と並んで、ホップの一大生産地である東北の中でも特に生産量の多い地域である。その遠野市にはこの自慢のホップを用いてビールを造っているクラフトビール醸造所が既に二箇所あるが、来春三箇所目ができる予定となっている。「ホップの里からビールの里へ」を合言葉に、官民挙げてビールでまちおこしに取り組んでいる遠野市らしい話であるが、これはすごいことである。遠野市の人口は現在二万五千人ほど。本誌一四四号で、全国の都道府県の人口一〇万人当たりのクラフトビール醸造所数を比較してみたが、その割合が最も高い山梨県でも一〇万人当たり二・七四だった。ところが、遠野をこの計算に当てはめてみると、人口一〇万人当たり一二というんでもない値になるのである。私が住む仙台市の人口は現在およそ一一〇万人なので、遠野の比率を当てはめると、仙台市には実に一三二ものクラフトビール醸造所がないといけないことになる。

革新的なホップの使い方

そして、私のこの三箇所目に見えるクラフトビール醸造所に大いに注目している。「グッドホップス」という、いかにもホップを重視していることが窺える名前はこのクラフトビール醸造所のこのクラフトビールの使用所は、新しいホップの持ち味を最大限に引き出す使い方をしようとしているのである。

ホップは雌雄異株であるが世に出ているのはこのうちの雌株に「種花(まりはな)」と呼ばれるものである。さらに言えば、種花そのものではなく、この種花の中にあるルプリンという黄色い粒上の樹脂成分こそが、ビールに香りと苦みを付与するものの正体なのである。

保存ができるように熱を加えて乾燥させ、さらにはペレット状にして用いるのが通常の使い方だが、先ほど書いたように、それだと飛んでしまう成分もある。そこで、生のまま使用したり、キリンのように凍結粉砕したものを使用したりする方法が編み出された。この方法だと元々のホップのフレッシュな香りが楽しめるが、一方でビール通の人からは「グラスシー(草ささい)な香り」と評されることもある。

「グッドホップス」の方法

「グッドホップス」の方法

「グッドホップス」の方法

「グッドホップス」の方法

「グッドホップス」の方法

「グッドホップス」の方法

論は、これらと大きく異なる。詳細な方法は公開されていないが、この種花の中にあるルプリンのみを何らかの方法で取り出し、熱を加えることなくパウダー状にして用いているのである。こうすると確かに、種花の部分には入らないので、ホップ(の中にあるルプリン)本来の香りと苦みだけが残り、恐らくは種花本体に由来すると思われる「グラスシー」は大幅に低減されるのではないかと思われる。いわばホップの持つ特性を最大限に引き出してビールに付与できるわけである。

期待されるホップの薬理作用

ホップはビール以外に使用道がないように思われているかもしれない。確かにその使い道が圧倒的に多いが、実は六〇〇年以上前から、一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

熊問題の解決にもホップ栽培を

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

元々国内で圧倒的なシェアを持つ東北のホップ栽培だが、先に紹介したようにひと頃よりもその栽培面積も生産量も減少してしまっている。このホップ栽培をもう一度東北の農業の基幹産業として復興させる取り組みを、遠野市をモデルに東北でホップ栽培の実績がある地域で官民挙げて始

めてはどうかと考える。それは、地元産の原料を使ったこでしか味わえないビールを造って、国内外の他地域から人を呼び込む施策にも大いに貢献するだろう。今後ホップの人体への有益な働きがどんどん明らかになっていくことを見越して先手を打つ意味でも重要である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

人間と熊との境界線を押し戻すためには、この「里山」の復興が欠かせないが、そこにホップを植えてはどうだろうか。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

温暖化の進展に伴い、かつてホップ栽培適地であった平野部では気温が上がりすぎる傾向がある。気温が上がるとホップの栽培面積を拡大することは、昨今問題になっている熊問題の解決の一助になる可能性がある。ここ数年、熊による人的被害が増加している。これは単に山にえさが足りないといったことが理由なのではなく、熊の個体数が大きく増えた一方、地方で過疎化が進んで人口が減少し、熊の活動エリアが拡大していることが理由である。

南羽から北羽を羨望し 北羽から南羽を憧憬する事

関心のない遠方の地域の人々にとって、島根県と鳥取県はどちらが西でどちらが東かわからない、もしくは「忘れた」というような話をよく聞くが、これが東北で言うと、山形県と秋田県にも当てはまるらしい。つまり、どちらが北で、どちらが南だっけ?という具合に・当事者(地元民)からすれば失礼極まりない話ではあり、個人的には出雲大社のある島根と、大砂丘のある鳥取をどうすれば間違える事ができるのかと思うのだが、一方でやはり個人的には、九州の佐賀県と長崎県の位置関係がよくわからないし、何と比較的の近県である茨城・栃木の情報を取り違えた事もある。こ



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

証されたものでは勿論なかつた。故に後の南羽・山形と北羽・秋田は古来大きく異なる側面を有し、諸事情から敵対・分断あるいは互いに無関心ですらある時代を通過してきたのである。

歴史面での一般的な認識としては、早くから平定された南羽と長く蝦夷勢力が維持され朝廷への多くの叛乱が起された北羽との対比があり、拙稿にて以前言及した、鳥海山を挟んでアイヌ語地名が膨大に残る秋田と、ほとんどその存在が認められない山形という現象の証左ともされてこ

このころが、ならば北羽は蝦夷の伝統を維持して中央への反骨を示し続けたかといえはむしろ逆で、平安期侵略者とも言える源頼義に協力して陸奥の安倍氏を滅ぼした出羽清原氏、その後平泉藤原氏四代泰衡を裏切りその滅亡を決定的にした河田次郎、更には江戸末期勤皇の証明を迫られ奥羽越列藩同盟をやはり裏切りの形で脱し同盟瓦解に導いた秋田(久保田)藩という具合に、政治的には常に東北の足を掬うような結果的にも不名誉な事ばかりとしてきたようにも思える。

実のところ秋田は、歴史の華々しい表舞台になつた事がない。縄文時代は青森県、平安時代は岩手県、戦国時代は宮城・山形両県、江戸末期は福島・

山形両県など各地域が脚光を浴びたと言える時代を持つが、秋田といえはこの時代、というものがなく、印象的な歴史的・英雄的人物という存在も思い浮かばないというのも逆に興味深いところである。

ならば、秋田は誠に以つて取るに足りない空虚なる風土なのかといえは全くそんな事はなく、ここ北羽の真価は別方面において無限に輝くのである。そしてその輝きこそが、今後東北全体を照らす鍵になるような気がしてならないのだ。

実は私が最初に秋田を訪れた記憶は、二〇代半ばの頃自ら意図的に旅した時のもので、その旅先とは何とかの「マタギの里」阿仁地方であった。そう、私が秋田を意識した契機は、伝統的狩猟集団マタギという存在にあつたのである。

その始まりは、意外なところで、自然の中の仕事道具などの研究や図解を得意とする作家・遠藤ケイの『男の民俗学』という本で知つたマタギ伝統の万能山刀「フクロナガサ」に魅入られた事だつた。何と、当時住んでいた東京の神田神保町の刃物店で現物を発見して購入してしまい、後に東北各地を旅するようになる中で、このナガサを実際に鍛造する土地へも足を運びたいと思つたのである。

フクロナガサは柄の部分が一丁と一体型の鉄製で木の

棒を差し込んでいざとなれば熊と闘う槍にできるような筒形になつており、造れる鍛冶師が現地であつた一人しかいないと聞いていたが会いに行つてみると何と彼は既に亡くなつており奥様がもてなして下さつた。

「確かに、主人が造つたナガサですね。」と私が持参した山刀を少しみじみと確かめられていた奥様の姿が忘れられないがその後親族の方がナガサ鍛冶を引き継ぎ、今も続けられていくのである。

矢口高雄の漫画『マタギ列伝』や、西村晃主演の映画『マタギ』など、古くから創作の題材ともなつてきたマタギは、平安鎌倉期現在の山形県山寺周辺を狩場としていた警司警三郎がこの地に寺院を建立するという慈覚大師に山を譲り、北羽の阿仁に移つた事が起源だといふ。この伝承の真偽はともかく、実際に秋田のマタギが東北・越後各地の山々に旅し、習俗や知識を広めた事から秋田が他地域に影響を与えうる文化の一つであつた事は確かであると思える。

山中でのみ話されるアイヌ語起源の「山言葉」、蝦夷を彷彿とさせる狩猟や野外生活の技術など、縄文的・蝦夷的なものを未来への指標・立脚点として見直しを進める、特に北東北にとつては一つの象徴的存在とも言えるだろう。

無論、マタギなどは秋田の魅力語る筆頭とするにはまだまだマニアックな話題であり、まずは男鹿半島寒風山などに見られる北緯四〇度線前後特有の雄大な風景や、秋田市や飲茶街・川反の味わい深い街並、竿燈祭や西馬音内盆踊り、そしてナマゲなどの独特にして強い印象を残す祭礼・習俗、ハタハタやいぶりがっこ、比内地鶏にきりたんぼ鍋といった食文化などに触れれば何から何までが他では見られない独自のものである事がわかるだろう。

山形県人としては、逆に秋田にはないものとして大霊場・出羽三山やだだぢや豆、蕎麦、芋煮などの食文化が誇らしく思え、安心感も覚えるものだが、独特さやインパクトの点ではやはり秋田に数歩譲らざるを得ないと思ふ。

おそろく南羽山形は南奥福島と同じく西南文化北上の緩衝地帯となり、以北の縄文・蝦夷由来の文化をある程度衰退から守る役割を果たした。故に、西南との文化のブレンド具合が異なりながら今も互いに似ているのだ。庄内の実家では毎年正月には秋田からハタハタ寿司を取り寄せており、立派に風物詩となつていたが、大体において山形と宮城が互いの違いに関心を抱き合い交流を密にしてきた事に比較して、山形と秋田は似過ぎるが故に、つまりは欠けている部分を補い合うという関係ではない

が故に長く鳥海山を境として、ある意味では無関心同士だつたのかも知れない。

ところでこうした秋田を秋田たらしめる特色の秘密は何なのか―それはこの地が西南側から見ても北方から見ても「奥地」的位置づけでありながら、日本海沿岸である大陸を含めた所謂「環日本海」世界視点で見れば第一の「玄関口」だつたという事かも知れない。

長く裏日本というネガティブイメージが付く日本海沿岸側であるが、かつては大陸との交流の主力港が並び、北方も津軽十三湊とともに秋田の能代湊、秋田城が沿海州に存在した古代国家・渤海との交流で知られるこの事は秋田美人のルーツとしてもよく引き合いに出される要素である。

実はつい先月頃、近年では珍しくなつてきた東北関連の大型新刊が書店棚に出現した。題して、『秋田―環日本海文明への扉』。秋田県土崎港出身の、美術・写真論の思想家である伊藤俊治氏によるもので、郷土・秋田を多角的視点で論じ尽くす大作である。

「文明の行き止まりとされたその地こそ(中略)、大陸や島々の人々が行き交う北方民族たちの文化ネットワークの玄関口であつた」『異国からの『マレピト』が起動する文化変容。厳寒の雪国で洗練されていく精神と美意識。(中略)そ

秋田に於いては、実はもう一つ最近のトピックがある。今年一見地味ながら俄かに話題となつた『ルックパツク』というアニメ映画だ。上映時間一時間にも満たないにもかかわらず好評を博し興行的にも大成功、海外でも絶賛された異例の作品だが、内容は田舎に住む漫画家を目指す二人の女子高生の物語だ。斬新ながら瑞々しい作画と心情の表現は鮮烈に観る者の心を打つが、何の予備知識もなく観ていたら、山形市の東北芸術工科大学そのものが登場してきて驚いた。

原作者である漫画家・藤本タツキ氏は秋田県にかほ市出身で、芸工大卒業生だといふ。つまり作品は半自伝的なストーリーだつたのだ。今や、秋田から山形の芸術大学を目指し、そこから世界へ飛び出せる時代なのだ。その事にあらためて驚きつつ、いつの間にか互いに磨き合い、思いがけずとんでもない熱を帯び始めた秋田、山形、そして東北から己も手を放すまい―そう思つていたのである。

秋田に於いては、実はもう一つ最近のトピックがある。今年一見地味ながら俄かに話題となつた『ルックパツク』というアニメ映画だ。上映時間一時間にも満たないにもかかわらず好評を博し興行的にも大成功、海外でも絶賛された異例の作品だが、内容は田舎に住む漫画家を目指す二人の女子高生の物語だ。斬新ながら瑞々しい作画と心情の表現は鮮烈に観る者の心を打つが、何の予備知識もなく観ていたら、山形市の東北芸術工科大学そのものが登場してきて驚いた。

原作者である漫画家・藤本タツキ氏は秋田県にかほ市出身で、芸工大卒業生だといふ。つまり作品は半自伝的なストーリーだつたのだ。今や、秋田から山形の芸術大学を目指し、そこから世界へ飛び出せる時代なのだ。その事にあらためて驚きつつ、いつの間にか互いに磨き合い、思いがけずとんでもない熱を帯び始めた秋田、山形、そして東北から己も手を放すまい―そう思つていたのである。

秋田に於いては、実はもう一つ最近のトピックがある。今年一見地味ながら俄かに話題となつた『ルックパツク』というアニメ映画だ。上映時間一時間にも満たないにもかかわらず好評を博し興行的にも大成功、海外でも絶賛された異例の作品だが、内容は田舎に住む漫画家を目指す二人の女子高生の物語だ。斬新ながら瑞々しい作画と心情の表現は鮮烈に観る者の心を打つが、何の予備知識もなく観ていたら、山形市の東北芸術工科大学そのものが登場してきて驚いた。

原作者である漫画家・藤本タツキ氏は秋田県にかほ市出身で、芸工大卒業生だといふ。つまり作品は半自伝的なストーリーだつたのだ。今や、秋田から山形の芸術大学を目指し、そこから世界へ飛び出せる時代なのだ。その事にあらためて驚きつつ、いつの間にか互いに磨き合い、思いがけずとんでもない熱を帯び始めた秋田、山形、そして東北から己も手を放すまい―そう思つていたのである。



『秋田―環日本海文明への扉』 亜紀書房 2024年

このところ、日本における人口減少時代の最先端を行くワースト県であるとか熊被害に関する事件などネガティブな報道が目立つ秋田県。だが、そのような鬱屈した状況をむしろ逆手に取り、「裏日本」という仮面に隠れた豊穡なる世界を開示して、それを武器としてここからいくらでも始められる―そのように感じさせてくれる何かがある。

おそろく、我が山形をテーマとしてはここまで説得力を持つ事はできなかっただろう表紙も相俟つて、秋田の底知れなさを垣間見る事ができる力強い一冊だ。

秋田に於いては、実はもう一つ最近のトピックがある。今年一見地味ながら俄かに話題となつた『ルックパツク』というアニメ映画だ。上映時間一時間にも満たないにもかかわらず好評を博し興行的にも大成功、海外でも絶賛された異例の作品だが、内容は田舎に住む漫画家を目指す二人の女子高生の物語だ。斬新ながら瑞々しい作画と心情の表現は鮮烈に観る者の心を打つが、何の予備知識もなく観ていたら、山形市の東北芸術工科大学そのものが登場してきて驚いた。

原作者である漫画家・藤本タツキ氏は秋田県にかほ市出身で、芸工大卒業生だといふ。つまり作品は半自伝的なストーリーだつたのだ。今や、秋田から山形の芸術大学を目指し、そこから世界へ飛び出せる時代なのだ。その事にあらためて驚きつつ、いつの間にか互いに磨き合い、思いがけずとんでもない熱を帯び始めた秋田、山形、そして東北から己も手を放すまい―そう思つていたのである。



雪化粧の早池峰山



にわか雪



松葉に雪

シリーズ 遠野の自然
「遠野の大雪」
遠野 1000 景より

ふとカレンダーをながめたら、今年も残すところあとわずか二週間しかないことに気づき、突然あわてる。年齢を重ねるごとに、カレンダー上の月日の経過がどんどん早くなり、「体内時計」とのかい離が大きくなっていくように感じる。外部の自然と離れ、隔離されているからこんなことになるのかとも思う。自然の運行を六感すべてを使って感じ取ってれば、こんなことにはならないだろう。外なる自然からずっと隔離されたままの世界は、まさに「不自然」きわまりない。いつも外の自然を感じていれば、「体内時計」とのかい離も発生せず、調和のとれた生活になるのだ。



キクラゲ



ユキノシタ (エノキダケ)



寒い朝の柿



ウメモドキ



境内最後の紅葉

東北の半導体産業は東北経済をけん引していくか？

キオクシア岩手も、半導体産業誘致の産官学の協議会設立も、NTKセラテックも、東北大学の新研究所も、大衡村のリベンジも！

東北半導体産業にうれしいニュース続々登場

最近、東北半導体産業にとつてうれしいニュースが続々と登場している。

宮城県の大衡村への台湾のPSMCの工場進出が突如キャンセルされるとい

ニュースが今年九月に発表されてから、東北半導体産業はズルズルと後退して

くのかと思われていたところに、最近立て続けにグッドニュースが発表されて、

キオクシアの株式市場決まる

まずは、岩手県北上市にあるキオクシア岩手株式会社の親会社である国内半導

体メモリー大手のキオクシアホールディングスの株式

上場がようやく本決まりとなった。

今年九月には、新規株式公開に伴う新株発行と売り

出しの価格を1株当たり千四百五十五円に決定し、

今月十八日という上場日も決定した。

これにより時価総額は約七千八百四十億円になる見

通しで、十月に上場した東京地下鉄を上回り日本で今年最大のIPOになるとい



キオクシア 12月中旬上場
岩手北上市に工場を持つキオクシアがやっと株式上場する (テレ東 BIZ より)

半導体産業誘致の産官学の協議会設立

次は、半導体関連産業の誘致に向け、産学官が連携

した新たな組織が宮城県富谷市で設立されたという

ニュース。

設立されたのは、T3みちのく協議会で「とみやつな

ぎつなぐれ」の頭文字を取って名付けられた。



半導体産業誘致の産官学の協議会設立 (富谷市HPより)

NTKセラテック新工場建設

日本特殊陶業の子会社のNTKセラテック(仙台市)

は十日、半導体製造装置向けのセラミックス製品の

新工場を宮城県富谷市に建設し、二〇二六年十二月に稼働させると発表した。

総投資額は数百億円規模になる見通しで、半導体市場の拡大に備えて大幅な能力増強に踏み切る。

富谷市内の工業団地に十二万四千平方メートルの用地を取得し、第一期として地上2階建ての工場・厚生棟を建設すること。



NTKセラテック新工場建設 (日経新聞 12/10 より)

東北大学新研究所設置

国立大学法人東北大学と住友ベークライト株式会社

は二〇二五年一月一日に、『住友ベークライト×東北

大学次世代半導体向け素材・プロセス共創研究所』

を東北大学青葉山キャンパス内に設置し、活動を開始すると発表した。

東北大学が持つ「共創研究所」制度を活用し、東北大学と共に住友ベークライト



東北大学・住友ベークライトとの新研究所設立 (電波新聞 12/12 より)

宮城県の大衡村のリベンジもある？

最後の潜在的なニュース、これから発表されるであろうニュースは、宮城県の大衡村のリベンジである。

今年九月に大衡村への台湾のPSMCの工場進出が突如キャンセルされたとの発



大衡村のリベンジなるか？ (TBS NEWS DIG 2024.9.30 より)

製造するのはシリコンウエハーを固定する「静電チャック」などのセラミックス製品で、東京エレクトロンなどの半導体製造装置メーカー向けに供給するということである。

このニュースも非常に楽しみである。このように、東北半導体産業の未来はとも明るい。さらに明るいニュースが次から次へとやってきて、東北経済を強くけん引して欲しいものだ。



写真で
お伝えする
東北の風景
**「東北の晩秋
と初冬」**

写真撮影
尾崎匠

